

ことばが可能性を作る

野矢茂樹



若い人よりも年寄りのほうが多くの可能性をもっている。そんな、なんだか生きる希望が湧いてきそうな話をしよう。

ただし、ここでいう「可能性」とは「論理的可能性」のことである。あるいは、「思考可能性」のことである。私たちは無数の可能性に囲まれて、ただ一つの現実を生きている。私はいま自分の書齋の中にいるが、それ以外の可能性がなかったわけではない。外を散歩していたかもしれない。どこかのラーメン屋に入り込んでいたかもしれない。あるいは、高い塀の中に収監されていたかもしれない。もちろん、いまの私には何も思い当たることはない。しかし、可能性としては、私は大泥棒だったかもしれない。それはほとんどありそうにないことではあるけれども、論理的な可能性としては否定できない。つまり、そんなあれこれを考えることはできる。

思考の可能性を開くために

私たちは現実を反したことをさまざまに考えることができる。あまりに日常茶飯のことなので、あたりまえに思っているかもしれないが、しかし、ちよつと立ち止まって考えてみたい。どうして現実を反したことが考えられるのだろうか。原理的というか、根本的な問題なので、できるだけシンプルな場面で考えよう。部屋に何か置物を置くとする。なんでもよろしいのだが、何か具体的なイメージがあったほうがよいのであれば、じゃあ、招き猫を置くでしょう。いまは仮に机の上に置いてある。しかし、なんとなくじゃまである。そこであれこれ考える。本棚のところに置いたらどうか。玄関にもっていったらどうか。いつそトイレに置くか。こうした想像が可能になるためには、なによりもまず、置物と机が分節化されていなければならない。

あたりまえすぎて何を言いたいのかわかりにくいかも知れないが、哲学だと思つてがまんして、しばらくつきあつていただきたい。もし置物と机とが分節化されていなかったらどうか。それはちょうど、具象的な静物画を見方を変えて抽象画として見るような感じである。目の前の風景は、招き猫も机も、その全体が渾然一体となった模様でしかない。もしそうなったら、招き猫を机の上から別のところに移そうなどという考えも浮かびはしない。だから、ともあれ、招き猫の置物と机とは分節化されていなければならない。

ことばで世界のレイアウトを試す

だがそれだけではまだ反事実的な思考は可能にならない。そこで分節化されたそれら置物や机を「代理する」ものが何かなければならない。置物や机を表現する「記号」と言つてもよい。例えば引つ越しのときなど、私は部屋の図面を用意し、その図面の縮尺に合わせて自分のもっている家具の大きさに厚紙を切り抜き、図面上に厚紙を置いてさまざまレイアウトを試してみることがある。あるとき引つ越し業者が置けません入りませなどと弱音を吐いたので、計算上は入るはずだがんばれと叱咤し、ついに入れおかせてみんなで安堵したなどということもあった。その場合の部屋の図面や家具を表現した厚紙が、ここで言う「代理」あるいは「記号」である。もしそのような代理物がないとしたら、どうなるだろうか。その場合には現物しか

ない。いまの引つ越しの例で言えば、現物の部屋と現物の家具。そこで私はそれらでさまざまなレイアウトを試すことになる。現物の机を現物の部屋の中でその隅の方に置き、現物の本棚を現物の机の右側に置いてみる。うまくない。そこで本棚は机の左側にしてみ、等々。しかし、ここには反事実的な可能性など何ひとつありはない。「試みに」と言いながら、全部実際にやってみているのである。そこにはただ現実しかない。もし現物しかないならば、現物をあれこれ組み合わせるみたところで、それはたんにあれやこれやの現実がそこで現れるというにすぎない。可能性を開くには、現物を表現した代理物ないし記号がなければならないのである。

そして、私たちがもっている最も手軽に利用できる現物の代理が、ことばにはかならない。それはふつうには音声言語と文字言語である。しかし、拡張して言うならば、何か他のものを意味する記号すべてを「ことば」と呼ぶことも許されるだろう。その意味では、家具を表現した厚紙もことばだと言える。私たちはことばをさまざまに組み合わせ、現実のない世界のレイアウトを試すのである。例えば、「野矢」で特定の人物を表し、「逆立ちして歩く」で特定の動作を表し、それを日本語の文法に従って組み合わせ「野矢が逆立ちして歩く」という文を作れば、そこに反事実的な可能性が示されることになる。現物の野矢に実際の逆立ち歩きをさせるのでは、それは可能性ではなく現実性であり、それでは野矢は疲れてしまう。

それゆえ広い意味で言語をもっていなければ、反事実的な可能性は開けてこない。しかも、その言語は、分節化され、多様な組み合わせが試せるような言語でなければならぬ。言語をもつ動物は少なくないが、そのような特徴をもった言語を使用しているのは、人間だけではないだろうか。例えば、敵が来たということに対して「キーツ」と叫び声を発して仲間を伝える。あるいはここにエサがあるということに対して「ホー」と声を挙げる。それはことばによるコミュニケーションと言えよう。しかし、それは分節化され、多様な組み合わせが試せる言語ではない。だから、そのような動物は、たとえ言語をもっていたとしても、現実の敵に現実「キーツ」と反応し、現実のエサに現実「ホー」と反応するにとどまる。そして彼らは、自分が生きている現実を取り巻く無数の反事実的な可能性に思いを馳せることがない。

思考を広げることば

人間は、いま私たちが使っているような言語を獲得することによって、はじめて非現実の可能性へと思考を広げることができるようになった。それが幸せなことだったのかどうかはわからない。しかし、ともあれ私たちはそういう非現実にも生きる存在なのである。

このことは、言語が複雑になり、使用できる語彙が増え、概念が増えるにつれて、試せる組み合わせの数も増え、それゆえ思考可能性も豊かになるということ

を意味している。そう考えるならば、ほらね、若い人よりも年寄りのほうが、豊かな可能性をもっていると言いうことができるのである。そしてまた、それぞれの専門に依拠して専門用語と呼ばれるものが必要になってくる理由の一つも、ここにある。哲学などにも、「イデア」(プラトン) だとか「超越論的主観」(カント、フッサール) だとか、あげくの果ては「被投的投企」(ハイデガー) などという、どういう日本語なのかさっぱりわからない用語が登場してくる。これはこれで哲学者にも反省すべき点が多々あるのだが、しかし、独自の思考を紡ぎだすには独自のことばが必要なのである。思考を鍛えるためには、ことばを鍛えなければいけない。思考をより豊かにするにはことばをより豊かなものにするしかないのである。

とはいえ、成長するにつれてことばが豊かになるばかりというほど、単純なものではないだろう。いま若い人と話をする、私などにはわからないことばがいくつもあがるが、もし、子どもの頃の自分といまの私が対話をしたならば、もういまの私にはわからなくなっていることばが、やはりあるのではないだろうか。ただ成長してきただけではない。失ったものもずいぶんあるにちがいない。

野矢茂樹(のやしげき) 哲学者。一九五四年、東京都の生まれ。北海道大学を経て現在東京大学教授。著書に『心と他者』『哲学の謎』『哲学・航海日誌』『論理哲学論考を読む』『入門! 論理学』など。